

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 深沢七郎 『檜山節考』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 62 回のツイキャス読書会の課題図書は、サン=テグジュペリの『星の王子さま』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

雪降る山あい

鄙びた山あいに親子の影が揺らぐ

夕靄の中には
月と雲の残影がかかっている、
親子の姿はどんどん霞んでいく

二人の影はやがて涙まみれの
ひとりの男と変わった

肩に降りたボタン雪が
おかあより重いとでも感じたか

踵を返してしまう男の胸には
切ない喜びと悲しさが溢れる

凍え切った赤い耳には
子供達の淡く甘い声が聞こえる

檜山には雪が降る
いつ溶けるか知らぬまま…

(おわり)

『檜山節考』 感想文

村の食料事情の為、おりん婆さんは檜山参りというこじつけで、山に捨てられる。昔の 70 歳ならかなりの高齢で、仕方がない事かもしれないけど酷い習慣だなと読んでいて悲しい気持ちになりました。

今は高齢になっても山に捨てられる事もないし、良かった。と思いますが、何か『檜山節考』が、形をかえているだけの気もしました。

弱い立場の人が、社会から排除されているような、生産性ばかりが優先されてるようになってはいないかな？と考えさせられました。

私は、この世に存在する限りすべての人は必要だから存在するんだと思います。

そんな事はきれい事だとも思いますが、今時点で、今存在するみんなが幸せに暮らすにはどうしたら良いかを考えて行くようにしないと終わってしまうように思いました。

おりん婆さんの村は、その後どうなったのかすごく気になります。

最後、玉やんが居なくて、そんなに広い家でもなさそうなのに見当たらないから、玉やんがおりん婆さんを迎えに行ってくれていたら良いのになと思いました。

(おわり)

悲しくも清々しい死との向き合い方

おりんのモデルは
キリストと釈迦である、
と「白鳥の死」のほうに書いてあった。

たしかに郷愁たっぷりの愛らしい方言で家族の日常がコミカルに進んでゆくのだが、
この村の日常を俯瞰で見ているおりんの心は、
すっかり覚悟が決まっているので、世俗への未練のようなぶれは一切感じさせない。

おりんにとって「山へ行く」準備は、死という晴れ舞台にあがる女優さんの準備のようだった。
この小説は悲劇ではなく、全編がお涙ちょうだいでもない。

役者はおおまじめにコミカルな台詞を語り、観客を楽しませ、そして最後の辰平の台詞で泣かせる。
話の筋を知って読んでいても、情けに訴える表現は極力そぎ落とされていて、
「親を棄てる」という言葉は最後にしか出てこない。

でもなぜこんなにも清々しい最後なのだろうか。

読んでいて不思議な感覚だったので
本に収められている「白鳥の死」もはじめて読み、
この作家の死生観や観察眼にふれ、ある意味で共感した。
そこにある冷たい自分の感情に気づかされて、少しうろたえた。

今まで、家族や友人や恩人の死に触れて、そのときは悲しく落ち込んでも
いつの間にか日常から悲しみが消えてゆく感覚を、誰のものとも比べようがなくただ虚しく思ってきた。

死んでしまったらただの死骸なのだ。
わたしは、ヒューマニズムに訴えすぎる演出があまり好きではない。
だから「檜山節考」の世界観に共感したのだが
鋭く、どこまでも深く「親を死の山へ置いてくる」という内容を淡々と連ねていることに圧倒された。
だけれど、まだここに描かれている日本人の死生観を整理できていない。

これからも何度か読んで自分の中に反復したいと思ったこと。
檜山のてっぺん近くで白い雪にうっすら覆われた老いた小さきおりんの姿。
美しい白狐のようだったという神々しいシーン。
わたしが死と向き合う瞬間もこうでありたいと
ひとつ理想形を突きつけられたような、その精神の格好良さに惚れ惚れした。

(おわり)

「私は迷探偵 a.leaf である」—私は〇〇であるシリーズ第二弾！—

1

私はこの度「信州読書会」からの依頼で「深沢七郎」という人物の調査を任された。これは私の初仕事になるから、かなり気合が入っている。早速、資料として渡された「檜山節考」という書物をまず読んでみることにした。

私は読後、何かはつきりしない妙な印象を持った。というのは、話の内容は前に読書会で扱った「野火」のような人間の残虐な行為が描かれているのに、それに対する悲しみや怒りを、私はそれ程感じなかったからだ。加害者も被害者も納得済みで理不尽な行為は静かに行われていく。それは、特別な事ではなく、日常的な出来事であり年間行事にさえなっている。死ぬことを迫られたおりんさんにしても、死を恐れることもなく、死ねることを喜んでいるかの様であった。

なぜだ？ 私は大きな疑問を持った。

そして、更に謎は加わった。本のカバーに書かれた略歴を見ると深沢氏はこの本をギタリストとして活躍していた時、発表している。年齢も既に42歳になっている。以前から作家になることが夢だったのか？なぜ急に書きたくなったのだ？

私は、作者に俄然興味が湧き、二つの謎を必ず解いてやろうと決めた。

2

まず、私のよきパートナーである Wikipedia で、深沢氏の「生育歴や環境」を調べることにした。すると、答えに繋がると思われる事実が幾つか判明した。

作者は、旧制中学生の時からギターを弾いている。大正時代にひく少年はおそらく少数派に違いない。作者は若い時からかなりのハイカラであり、自由な思考の持ち主であった。さらに作家活動を続けていた晩年も都会ではなく、田舎で暮らしている。作者は死ぬまで自由な生きかたを好んだという人物像が浮かび上がる。

また、作者は山梨の村に小さい時から住んでいた。村の共同体や慣習などにも当然ながら精通し、馴染んでいたに違いない。加えて、晩年、農場での暮らしを続けており、彼が(故郷)を愛していたことも感じられる。、作者は、自分の故郷を含め、村という共同体の伝統的な祭事、信仰への愛情や理解を持っている人であったことが分かる。

しかし、それならなぜ作者は、例えば過去の言い伝えだとして、共同体の悪の面をわざわざ物語にしたのであろうか？親子の愛情を際立たせるためか？ それとも、別の理由があったのか？ また、新しい謎ができてしまった。

謎を抱えたまま、私は、「作者が作品を書いた1956年の時代背景」を調べてみることにした。ここの記述から、この年に作者がなぜ急に、この作品を書く気になったのか、自信はないが、私なりの答えを見つけることができた。私は、次のように推察した。

1956年は、「ワルシャワ条約機構」が結ばれた年であった。アメリカの北大西洋条約機構に対抗してソ連が作ったものだが、説明によると、この頃から、核戦争での冷戦が始まったということだ。戦後12年が経過し、日本も人権が保障され平和な国を歩んでいた時であった。私は、これを知った作者は、戦時中の自由のなかった時代がまた来るかもしれないという恐怖感を大きく持ったのだと思う。年齢から考えて、Wikipedia には戦時中の彼の経歴が書かれていないのだが、戦争に参加しているのは間違いない。そこで、どんなひどいことを体験したかは私は、分からないが、自由をこよなく愛す彼にとって、かなり辛い体験だったに違いない。この危機感が彼をこの本への執筆に向かわせたのだと私は思う。

最初に書いた2つ目の謎はこれで解くことができた。しかしまだ全部謎は解けていない。私は、思考を進めた。

そして、遂に、私は、1つ目の謎と、途中から増えた謎の答えを導き出した。私の考えは次のようである。

作者は、初めて本を書くのにあたり、この危機感をどうやって書き表そうかと悩んだはずである。そこで思いついたのが故郷で今も伝説になって残っている姨捨の話である。これなら自分も村人だから、ある程度昔話の推察もできて長文でも、きちんと記述できるかもしれない。それに、事実の話ではないから村の人々や、神の記述もきつと許してもらえるだろう。私は今、希望に向かって生きている日本人にまた不快な思いを植え付ける気はない。また、私はギタリストへの道を選びはしたが、家族を愛しているし、弱い立場の人間の意志の弱さを戦時中に思い知り、それを責める気もないし、家族や友人が今も引き継いでいる神への信仰や祭事などの伝統文化も大切に思っている。自由の大切さと同時に、人間の力が及ばない自然の力や神の力も信じている。だから、戦時中のような弱者にだけ被害が及ぶ時代、人権が無視される時代に戻らないで欲しいというメッセージと、日本特有の文化の良さも伝えられたらいいと思う。

以上のように考えた作者は、残酷そうで残酷でない印象を与えるため、敢えて伝説から創作し、親子の愛情をメインに取り入れたのだと思う。作者の隠された思いから残酷さを無くした話になったと言える。これが、一つ目と途中の謎の答えだ。

私は書類に「深沢七郎氏の人物像・・・ 自由を愛した人。弱者を否定しなかった人。自然の力や神を畏敬した人。意志を貫いたけど、家族の意向や時代の意向と違ったことに悩んでもいた人。強そうで繊細な心の持ち主であり、優しい人であったと思われる。」と書いた。

そして、探偵もなかなか難しい仕事だなと、思った。

3

「お客さん、もう終点ですよ。起きてください。」

私は突然肩を叩かれて、目を覚ました。どうやら、「檜山節考」を読んだ後、車内で、眠ってしまったらしい。

窓から見えた見知らぬ景色に驚いて私は尋ねた。

「ここは、どこですか？」

すると、駅員は不気味な笑みを顔に浮かべて答えた。

「姨捨山駅です」

* お知らせ。。。ここに書いてある内容についてのお問い合わせは「信州読書会、宮澤氏の方」にお願い致します。
また、「私は〇〇である」第三弾は、今のところ未定ですのでご承知おきくださいませ。

(おわり)

きれいなパンツで出かけよう

アンケート調査によると多くの日本人が自宅で亡くなることを願っているらしいが、実際は7割以上の方が病院で亡くなっている。厚生労働省はこのほど終末期医療のガイドラインを改定するらしい。生活のスタイルが変わるにつれ、最期の時を迎えるスタイルも各々違う「多死社会」がやってくる。

織田信長は人生50年という文句を残したが、現政権下では人生100年構想会議なんてものが開かれている。

医師の長尾和宏先生の「平穏死」10の条件 胃ろう、抗がん剤、延命治療いつやめますか？ にこんなエピソードがある。

「私は出かける際、いつもきれいなパンツをはくよう心掛けています。履き古したパンツだともし私が突然倒れ病院に運ばれた際に家族が恥ずかしい思いをするかもしれませんから」と。

私はこの記述を読んで以前勤務していた病院で、外来診察をしていた医師と看護師が男性患者の胸の音を聞こうとワイシャツをめくり上げたところ、その方がブラジャーをしていて驚いた、と患者が帰った後で笑っていたのを思い出した。

インドの人々はガンジス川で沐浴する。ごみや排泄物やら流れてきてもお構いなし。そして自分の命が尽きたらガンジス川に流してもらうのだ。

チベットの奥地の人々は私財を処分して、五体投地で尺取虫のように青山カイラス巡礼をするのが何よりの夢で、死後は山の岩の上に遺体は放置される。それをハゲワシに綺麗についばまれるのがよいとされる文化が残っているらしい。

おりんさんは檜山参りに行くため、元気なうちに自ら全部残っていた歯を石臼ぶつけ折り、息子の後妻にイワナのとれる秘密の場所を教え、筵を編み、振る舞い酒も用意していた。私は慢性期の病院に勤務するが、そこには自分がなぜここにいて治療を受けているのか？自分がどこにいるのか？さえわからなくなってしまった方もいる。

君たちはどう生きるか？ だけではなく、「君たちはどうして生まれて来たのか？ 君たちはどう生きてどう死んでいくのか？」と心の中で患者さんと自分にいつも問いかけている。

最後に私は檜山参りより、松やんのお腹にいる子を「裏山に捨ててきてやっから」という話も現代社会にある話で怖いと思いました。

「ご飯は残して、よそから仕入れて、平和でいいな。戦争のない国」 Mr.children アンダーシャツより引用

(おわり)

『おりん』

私にとっての最大の関心事は、おりんが山に行くことを悲しんでいたかどうかだ。

おりんは、周囲に事あるごとに「来年になったらすぐ檜山まいりに行く」ことをPRしている。執拗なまでに。最初、その場面に私は、おりんの深い悲しみをみた気がした。この世に生きても飯喰らいなだけで役に立たない。自分の手で生産できるものが少なくなった。自らの存在を早くなくすことで周りが助かるのだ……。おりんがそう考え、自分を責めていると思った。

しかし、悲しんでいなかったとも考えられる。それは、背景とのからみだ。

この村は、共同体と個人の生が深く結びついている。共同体を維持するために、食料の事情がゆえ、村の高齢者は山に捨てられることで一律に70歳の寿命が決められていた。

おりんにとって、檜山まいりは自らに課された最後の課題だ。これはたった一人で向き合うもの。誰かに相談したり、こころの不安を分かち合うものではなかった。おりんは、自分にこの最大の試練を与えられたことに生きがいを感じ、感謝しているとも読み取れる。

むしろおりんは、自らの檜山まいりをとても積極的に捉えている。たった一人で身辺整理をし、振る舞い酒を造り、山の日取りも自分で決断するのだ。別れの会合ではおりんがスーパーヒーローだ。もしかすると、自分の死を自分で段取りできるということは、とてつもなく生きがいを感じられるものなのかもしれない。そう錯覚してしまう。

つまるところ、おりんは悲しんでなどいなかった。と考えられるのかもしれない。

ただ、けさ吉の当事者性のなさにはいたたまれない気持になる。生まれてくる子どもをネズミっ子と表現し、新しい命とおりんを天秤にかける発言には、もう少し人の気持に想像力が働かないものかと首をひねってしまう。けさ吉、この時ばかりはばあちゃんも悲しんだと思うよ、あんたも70歳になった時にはわかることだろうけどね。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『断捨離考』

現在、「断捨離」流行りだ。物を手放さないと人生がうまくいかないと、世間は圧力をかける。物理的な断捨離の次は「人間関係」だ。スマホの連絡先や名刺を整理して、不必要な人と会うことはやめましょう…だ。

確かに、一理ある。要らない物に囲まれていても意味はないし、不必要な人間関係はストレスだ。ただ、それは結局「捨てる」ことができるものだ。

それが、肉親との関係ならどうなのか。「愛着」や「執着」にどう向き合うのか、これが究極の断捨離だと思うのだ。

この小説の舞台は、信州の貧しい山村である。よって、食べ物総量は決まっている。厳しい掟や慣習によって村は維持され、その様は合理的でシステマティックだ。玉やんも夫の四十九日後すぐに、辰平の後妻に入る。松やんも妊娠したとたんに、おりんの家に入る。そして、ねずみっ子を見ないためにおりん自身が檜山まいりをする…家々で、どうやって口減らしをするか、まるでテトリスのブロックのようだ。そこに、無駄な感情は見当たらない。マズローでいう生理的・安全欲求を満たさないうちには、帰属や愛情を求める社会的欲求には辿り着かない典型だ。しかし、ほとんどの人間が社会的欲求まで満たされている現代にあっては、なかなか受け入れられない。

まだ寿命がある親を山に捨てるとは、とてつもない「断捨離」だ。病や怪我で安楽死の意味で捨てるのではなく、家族が生きていくために「決断」しなくてはいけないからだ。

私自身は肉親であれば、本人の意思関係なく、余命がなくても延命処置をして一日でも温かい体でいてほしいと願うだろう。ただ、この小説に出会い、それはただの「執着」なのではないかと気付いた。それは肉親に対する執着ではなく、自らの「生」に対しての執着だ。おりんは、数々の檜山まいりを見送って、自らの運命を受け入れた。彼女は「生」への執着を断捨離し、静かに死相が出た。ただ、辰平は母への愛着は捨てれずに辛い思いだったと思う。当たり前だ。でも、そのおりんの姿は辰平や玉やん、けさ吉みんなの必ず来る未来なのだ。

断捨離とは、「断行」「捨行」「離行」というヨガ思想であり、仏教・仏法と共通する理念らしい。おりんは、立派に檜山まいりを行い、仏になることが家族への最後の愛情だったのだと思う。そのおりんの姿に、物質的な断捨離さえできない私は、ただ打ちのめされるだけだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『榎山まいりに雪も降らない』

この村は、食料が限られている。これが所与の条件である。その中で、どうやって家を存続していくのか。その究極の解決法として、「榎山まいり」とよばれる、棄老の習慣が存続している。あとは、赤ちゃんを裏山に捨てる間引きである。

後妻である玉やんの食料は、おりんの榎山まいりでカバーできる。誤算だったのは松やんと、そのお腹のなかのけさ吉との間の赤ちゃんである。

妊娠4ヶ月で、家を追い出されて、おりんの家に来た松やん。かまどの火を焚くこともできないし、子守りもできない。でも、食べることは一人前。でも、まだまだ子どもである。子守りをしながら、辰平の末っ子(3歳)を、つんぼゆすりしたり、つねったりして、いじめる。そこには、自分の子か、辰平の末っ子が残るかのサバイバル戦がある。

おりんがきれいな根性で死んだからといって、この一家の暮らしが楽になるわけではない。

棄老は悪なのか？ 間引きは悪なのか？ 「みなが生き残るために、老人か赤ん坊の命のどちらかを犠牲にしなければならぬ」というジレンマは、現代の我々にも無縁ではない。

所与の条件により、強い者だけが生き残り、弱い者が殺されていく関係が掟になってしまう。現代の日本では、食糧不足は、解決されたが、まだ貧困は解決されてはいない。松やんのような子どもはたくさんいる。

イエスの12人の弟子は、順位を争った。イエスは、彼ら諭し、幼子を真ん中に置いた。

「おさなごをとりてその中におく」(マルコ福音書 第9章3節)

現象は没落する。生きているものは、いずれみんな死ぬ。これから生まれてくる幼子こそ未来の核心だ。所与の条件を一つでも減らすことができなければ、子どもの虐待はなくなる。未来は閉ざされていく。自分が生きる残るために、七谷に老人を突き落とす子どもたちがいるかもしれない。

所与の条件の中で生き延びるためには、共食いせざるという背景を背負った猟奇的な事件が続いている。

耳を突き刺すような、カラスの鳴き声が聞こえはしないか？

聞こえないふりをしてはいないか？

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343